

インドネシアの文学

インドネシアの作家たちは発禁や投獄されたり、身の危険にさらされたりしながらもタブーを犯し、時代の要請するテーマを描き続けてきました。

オランダの植民地支配、日本軍による占領統治、オランダ、イギリス軍と戦った独立戦争、初代大統領スカルノによる新国家建設と破綻、1965年の9月30日事件と大量虐殺、第二代大統領スハルトによる30年あまりに及ぶ独裁支配、その崩壊と改革、民主化の時代。植民地時代はもちろんのこと、独立後のインドネシアでも、言論の自由が十分に保障された時期はわずかではありません。

インドネシアの現代文学を代表する作家として名高いのが、プラムディヤ・アナンタ・トゥールです。植民地時代に幼少期を送り、独立戦争には兵として参加、スカルノ政権下では政府の華人政策に対する批判で身柄を拘束され、スハルト政権下では政治犯として14年にわたって拘留されました。

そんな苛烈な経歴を持つ彼をノーベル文学賞候補へと押し上げたのが『人間の大地』、『すべての民族の子』、『足跡』、『ガラスの家』の4部作です。一人のジャワ貴族出身の少年が民族主義者へと成長し、植民地支配と戦う様子を描いたものです。この小説は歴史を歪めてきたスハルト政権のありかたを問うものでした。だからこそ、スハルト政権はこの作品に文学作品を超えた意味を嗅ぎ取り、権力を脅かすものとして発禁処分にしたのでした。

また、セノ・グミラ・アジダルマは、スハルト政権下の恐怖政治の中でインドネシアに軍事併合された東ティモールの問題を扱いました。例えば『耳』という作品の中では東ティモールの凄惨な状況がそれとは明記されず、「戦場にいる恋人から送られてくる削ぎ落とされた耳の物語」として描かれています。この様な非現実的で、あり得ない物語を書いたセノに言わせると「最もあり得ないのはこのフィクションが事実に基づいていること」だそうです。

当時、インドネシア国内では東ティモールにおける人権抑圧や貧困、急激なインドネシア化の歪みについて公然と政府を批判することは決して許されませんでした。セノはエッセイの中で「ジャーナリズムが閉ざされたとき、文学が語る」と言っています。これこそが歴史の中でインドネシア文学が果たしてきた役割でしょう。作家たちは文学をひとつのメディアとして捉えていたのです。1999年春の来日講演で「日本の作家にとって窓から見えるのは桜の花かもしれない。だが、我々の窓越しに見えるのは血の河である」と語っています。日本とは比較にならないほどの厳しい環境で小説を書いてきたことが分かります。

スハルト独裁政権が倒れて以降の改革の時代、言論への抑圧は緩和され、文学をめぐる環境は大きく変わってきました。そのひとつが女性やマルチタレントなど新しい書き手の出現です。ジェナール・マエサ・アユもその中の一人です。彼女は、性の問題、女性への侮辱、暴力等をテーマに、現代インドネシアに生きるイスラム女性の地位、女性としての悲しみに目を向けさせるため、知り得たこと、経験したことを基に作品を書いています。しかしながら女性がそのような問題に触れることに対し、賞賛と同時に批判も多くあるようです。

題材は全く違いますが、現実を基にしたフィクション、インドネシアのタブーに目を向けさせるという点において、前述のセノ・グミラ・アジダルマやその他の時代を代表する作家たちと共通するものがジェナールの作品にはあります。

また昨年、日本でも出版された作品として注目したいのが、インドネシアで2005年に出版されたアンドレア・ヒラタ著『虹の少年たち』です。1970年代、南スマトラの小さな島にある生徒10人と校長先生、担任だけの貧しい小学校で子供たちが成長し、いろいろなことに挑戦していく物語です。

書籍をコピーするのが一般的であるインドネシアで、累計500万部という空前のベストセラーとなりました。すでに19カ国で翻訳されています。映画、テレビドラマも大ヒットし、舞台化されるなど、一連のブームは「ラスカル・プランギ (虹の少年たち)」現象とも呼ばれています。ヒットした理由はやはり“ノスタルジック”、“貧しくても負けない心”が描かれていた点でしょう。

スハルト独裁時代には2万部売れば大ベストセラーと言われたインドネシア出版界において500万部という数字は何を意味するのでしょうか。

民主化が進み、経済成長著しい近年のインドネシア社会において、インドネシア文学はまだまだ発展途上であり、作家たちはこれからも社会との関わりを意識しながら創作活動を行っていくのでしょうか。

以上

<これまでの岡山県インドネシアビジネスサポートデスクレポートは[こちら](#)から>

★岡山県インドネシアビジネスサポートデスク (PT. JC内) 概要★

所在地：WISMA NUSANTARA BUILDING 24th Floor

Jl. M. H Thamrin Kav 59 Jakarta Pusat Indonesia 10350

デスク担当者：PT.JC 武井 和宏 (たけい かずひろ)

対象エリア：インドネシア全域

※「岡山県インドネシアビジネスサポートデスク」では、岡山県内に事業所を有する企業や経済団体等のインドネシアでの事業展開を支援しています(岡山県から[公益社団法人 日本インドネシア経済協力事業協会](#)に業務を委託)。ご利用に当たっては、「[岡山県インドネシアビジネスサポートデスク](#)」[利用の手引き](#)をご覧ください。 [岡山県産業企画課マーケティング推進室](#) (電話 086-226-7365) までご相談ください。

※本レポートは岡山県内企業のインドネシアでの事業展開の一助とするため作成されたものであり、サポート対象に該当しない個別のお問い合わせには対応しておりません。